

循環器系機能障害をもつ成熟期の人への看護援助の検討

古田裕記子 宇陀三枝 下條梨早 (羽島市民病院)
奥村美奈子 梅津美香 北村直子 坪内美奈 平岡葉子 (大学)

I. はじめに

本研究は循環器系機能障害、特に急性心筋梗塞を発症した患者の円滑な社会復帰をめざし、平成14年度より取り組んでいる。平成17年度は3ヶ月毎の定期検査入院時に病棟看護師が効果的な援助ができるよう「改訂版看護サマリー」を作成し、病棟看護師から評価を得た。

一方、退院後の患者を支援する上で病棟と外来の看護の連携は重要であり、本研究においても外来との連携強化のあり方を模索していた。そこで病棟と外来の看護を繋ぐ媒介として看護サマリーが有効であると考え、本年度は「改訂版看護サマリー」を用いた外来看護師との連携を目指すことを目的とした。

II. 平成17年度までの研究活動の概要

平成14年度

急性心筋梗塞を発症した患者6名に初回外来、退院後3ヶ月、6ヶ月に面接調査を実施し、退院後の患者の状況や看護ニーズについての把握を行なった。

平成15年度

平成14年度の調査結果を基に、①壮年期の男性2名の事例を取り上げ、壮年期患者の社会復帰を促進する看護、②再発ハイリスクと判断した患者に再度面施を実施し、再発ハイリスク患者の再発を予防するための看護、について検討した。

平成16年度

平成15年度の検討から、看護師は退院後3ヶ月毎の心臓カテーテル検査入院日を患者支援の機会として意識し関わるのが大切であり、2泊3日の短い入院期間の中で効果的に関わる方法として退院時看護サマリイの記載内容を活用することが必要であること確認された。そのため、既存の退院時看護サマリイの記載内容を検討し、現状の問題・課題と活用する上での改善点や発展させるべき点を明らかにした。

平成17年度

平成16年度の結果を基に「改訂版看護サマリー」の作成と試用を実施し、循環器科チームの病棟看護師から「改訂版看護サマリー」の評価を得た。その結果、【次回まで目標】をはじめ改善点について良好な評価を得られ、正式な記録用紙と

して採用された。

III. 平成18年度の研究活動

1. 研究方法

- 1) 外来看護師に「改訂版看護サマリー」の活用状況についてアンケート調査を実施する。
 - 2) 検討会において「改訂版看護サマリー」を用いた外来との連携の在り方について検討する。
- 検討会参加メンバー: 現地及び大学側共同研究者。

2. 倫理的配慮

外来看護師に対して文書を用いて本研究の趣旨および研究協力について説明をするとともに、匿名性の保持を保障した。また、本研究は本学研究倫理審査部会の承認を得ている。

3. 結果

- 1) 第1回検討会 (平成18年4月)

アンケート調査内容と実施方法を検討した。

- 2) 第2回検討会 (平成18年6月)

アンケート調査に先立って外来看護師の代表に実施した「改訂版看護サマリー」活用状況に関する聞き取り結果の報告と、アンケートの内容および実施方法を検討した。

表1 「改訂版サマリー」の外来での活用状況聞き取り結果 (外来代表者より)

<現状>

- ・ 「改訂版サマリー」の存在自体知らなかった。
- ・ 現在外来カルテは患者が受診する当日に準備されている。外来看護師は多数の患者に対応しなければならないので、一人一人のカルテを見る余裕が無い。
- ・ 看護の連携は必要だと感じているが、現在は病棟と外来ともに依頼するだけで、一方通行の状況である。
- ・ 人員的に限界があり、現状として外来に循環器科専属の看護師を配置することは困難である。

<今後に向けた提案>

- ・ 病棟と外来の看護の連携は重要と考えているので、支援が必要な対象について事前に病棟から連絡があれば対応できるように検討したい。

<アンケート実施方法>

(1) アンケートの内容と書式

質問項目：外来受診日の患者との関わりの有無と程度、サマリー活用の有無と程度。

書式：A4版1枚

(2) 実施方法と期間：「改訂版看護サマリー」にアンケートを添付する。記載後所定場所に提出。病棟看護師が回収する。実施期間は第2回検討会終了後から平成18年12月とする。

3) 第3回検討会（平成18年10月）

アンケート調査の進捗状況と現地側共同研究者が1日外来業務を担当した際の感想を聞き、外来との連携のあり方について検討した。

アンケート調査については調査を依頼したが、日々の業務が多忙で記入が困難な状況であるとの報告がなされた。また1日外来業務を担当した感想として、検査処置室ができ以前に比べ外来業務も幾分か調整されて来ている。多数の患者に対応することが求められ多忙ではあるが、支援が必要な患者と関わる時間を確保することは可能ではないかとの報告がなされた。

これらの報告を基に、外来看護師が患者に関わり難くしている要因を検討した。その結果、看護師が多くのお客様に対応しなければならないこととともに、循環器科担当者が明確に決まっていないため関心を向けにくいのではないかと推測された。

そこで、患者側からも外来看護師に質問や疑問を投げ掛けやすい状況を整えることが必要との提案がなされ、入院時の簡単な援助内容とともに、患者が外来看護師に確認したい事柄が記入できる用紙を作成した。

＜患者から外来看護師への質問用紙＞

書式：A5版1枚

外来受診日
主治医
病棟担当 Ns
☆継続必要なポイントは以下の○項目です。
喫煙 糖尿病 高脂血症 肥満 高血圧 透析
内服薬 食事 運動 その他 ()
【記載すべきデータ・情報など】
☆次回心臓カテーテル検査までの目標
☆退院後困ったこと・聞きたい事・知りたい事など
☆外来看護師からのコメント 外来 Ns. サイン

「患者から外来看護師への質問用紙（仮称）」の1、2番目項目は「改訂版看護サマリー」を参考に病棟看護師が記入し、退院時に患者に渡す方法をとった。使用開始を平成18年11月とし、まず現地側共同研究者が担当看護師となった患者を対象とした。

4) 第4回検討会（平成19年1月）

第3回検討会で作成した「患者から外来看護師への質問用紙」の使用状況の報告とともに、外来看護に実施したアンケート調査の結果や現時点での外来との連携の状況を基に、今後の方向性を検討した。

表2 「改訂版看護サマリー」の外来看護の活用状況アンケート調査結果

対象患者12名分中回収4名分
1. 外来受診日に患者と関わることはできたか？
できた：4名（声をかけた、体調を尋ねた）
会えなかった：0名
顔を見た程度：0名
2. サマリーは活用できたか？
見ることができなかった：2名
活用できた：2名
・ 患者の既往歴を知るのに役立つ
・ 入院中の問題や引き続き様子をみていくのに声がかけやすい
3. その他
・ サマリーの色を変えてあっても、見る余裕がない
・ 前もって継続支援の申し出があるとよい。

「患者から外来看護師への質問用紙（仮称）」について

2名の患者に渡したが患者側の受け入れには特に問題が無かったため、今後も現地側共同研究者がプライマリーとなった患者を対象に渡し、外来看護師からの評価を得ることを確認した。

IV. 「改訂版看護サマリー」を用いた外来看護師との連携を目指した活動の評価と今後の方向性

「改訂版看護サマリー」を活用することで病棟と外来との看護の連携強化が図れるのではないかと考え1年間取り組んだ。しかし、アンケートや4回の検討会での討議結果から、看護サマリーを媒介とした方法のみでは連携強化は難しい状況にあることが確認された。その要因として、外来カルテが受診当日に準備されるため、外来看護

師は事前にサマリーを見る余裕が無いことが挙げられた。また、看護師は内科外来という枠組みで配属されており、当然循環器科を含めた他の内科に受診する患者への対応も求められる。こうした現状から、外来看護師は病棟看護師が求める程に循環器科の患者に関心を向けられないのではないかと推察された。

以上より、病棟と外来の看護の連携強化を図るためには「改訂版看護サマリー」を媒介とする方法に加え、病棟と外来の看護師が直接情報交換する機会をもつことが必要である。

今後は、継続支援が必要な患者について事前に外来に連絡するなど、病棟側からのアプローチを強化するとともに、現地側共同研究者が主になって病棟・外来の看護師と医師や他職種も交えたケースカンファレンスを開催し、患者情報の共有や支援方法の検討を共に行なう体制を整える必要がある。

V. 共同研究と討論の会での討議内容

まず「改訂版看護サマリー」を使用した外来看護師から以下のような感想や意見を得た。

- ・改訂版看護サマリーは色がグリーンになっているので、循環器科のサマリーであるという認識はしている。しかし、当日にカルテを準備している現状のため、サマリーを見る時間的な余裕が無い。また、外来で患者と接している立場で病棟の看護サマリーを読むと、視点が違うと感ずることがある。

- ・急性心筋梗塞の患者は、外来受診予定が退院後4週間8週間に設定されることが多く、実質的には退院後3ヶ月毎の定期カテーテル検査入院で病棟看護師がフォローすることが多いのではないかと感じている。

- ・同じ病棟に循環器科と呼吸器科の看護チームがあるが、例えば連携の方法についてもアプローチ異なるため、同じ病棟なのになぜだろうと感ずることがある。以前、1事例であるが呼吸器科チームと看護の連携に取り組み、良好な結果が得られているので、そうした経験を活かせば循環器科看護チームとの連携も可能ではないかと思う。

これらの発言を受けて、次のような討議がなされた。

1. 病棟・外来看護師間のコミュニケーションを図る。

病棟看護師が書いたサマリーの内容に疑問を感じた時は、病棟看護師に直接その疑問を伝えていくことが大切なのではないか。サマリーという

限られた紙面の中で表現できることには限界があるので、疑問を感じた時には直接確認することで解決されてくこともあると思う。また患者の退院後の生活一つとっても、入院中に想定していた状況と実際の退院後の生活が異なることも多分あるので、外来看護師が患者と接しサマリーの内容に疑問を感じた場合は、病棟看護師に伝えることが必要だと思う。情報の伝達手段としてサマリーは一つの方法ではあるがそれだけに頼らず、疑問に思ったこと、確認したいことを日々伝えあうことで、ケア対象の理解が深まり、より良い看護に結びついていくのではないかと考える。

また、こうした日々のコミュニケーションを意識して行なうこと同時に、今後の方向性として示されている外来・病棟看護師を交えたケースカンファレンスも有効だと考える。ケースカンファレンスの第一の目的はケア対象者への援助について話し合うことであるが、話し合いを通じてお互いの看護の現状を知る機会になるのではないかと思う。現時点では、一方的なアプローチに終始していると感じられるので、カンファレンスの場でお互いの意見を出し合い、相互が協力して連携の体制作りをすることが望ましいのではないかと考える。

2. 病棟の看護チーム間でのコミュニケーションを図る。

診療科の特徴別に同じ病棟に2つの看護チームが存在しているが、各チームで実施した看護の情報交換を密に行なう必要があるのではないかと考える。今回指摘があったように、連携という点で他チームが良好な結果を得ている事実があるので、そうした知見をチーム相互で提示し、病棟看護師全体の蓄積とすることが重要だと考える。

また、外来看護師との連携のように、病棟と他部署との関係を繋げる場合、同一病棟からチーム毎に異なったアプローチをすると受ける側に混乱が生じ、対応が煩雑となる可能性もあると推察される。こうしたことを防ぐためにも、看護チーム間のコミュニケーションを図り、他部署へのアプローチにおいて可能なところでは統一した対応が取れるよう病棟全体として検討する必要があるのではないかと考える。

3. 事例を通じて看護の学びを蓄積する

平成19年度は今回の討議で提示された病棟・外来の看護の連携強化に向けて具体的な意見を参考にしながら、特に継続的な援助が必要な事例に対して外来・病棟の看護師が連携して看護を実践し、丁寧な評価を行なうことが有効ではないかと考える。